米国サッカーNow

▷4◁

自ら動き楽しむ気風

日本人も奮闘「まずトライ」

かつて横浜M、大宮などでプレーしたMF原田慎太郎（29）が米国に渡って4年がたつ。所属するのはメジャーリーグサッカー（MLS）の下部に当たる独立リーグのピッツバーグ・リバーハウンズ。この小クラブを足場にMLS、そして欧州への飛躍を夢見る原田は「こちらの人は自分が楽しむために生きている。楽しむことがすべての前提。その精神風土がサッカーにも反映されている」。集団である前に、個を表現して認められようとする。

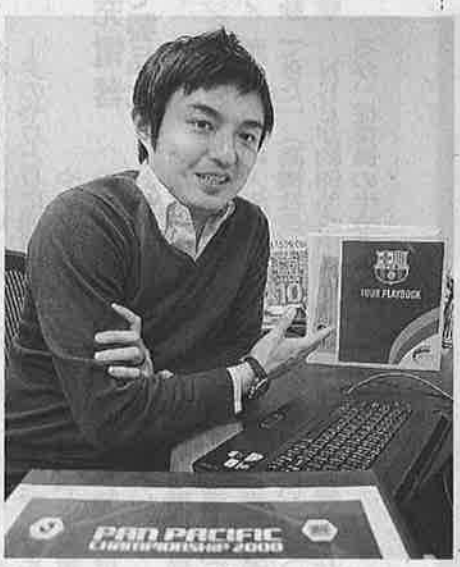
日本では考え抜くプレーをモットーにしていた原田には、米国サッカーが雑に映った。パスをしっかり回そうとしない。つなぎ役のMFが本職なのに、CBをやらされ納得がいかなかった。「でもハプニングをいちいち気にしていたら、米国ではやっていけない」

イングランドのクラブのスカウトの目にとまったこともあったが、入団には至らなかった。すんなりいかない現実にも、もういらだちはしない。いまでは、帰省して日本の練習に加わると、せわしなさに気がつく。

「プレッシングにダッシュ、いつも休まず全速力」。日本ではみんなそれに耐えるが、米国の同僚は耐えはしないだろう。

抵抗感があったCBも板につき、MFに戻るとプレーの幅は広がっていた。余裕が生まれ、自分の味を出せているように思うという。日本では考え過ぎて、楽しみきれなかったサッカーに、楽しみを見いだしている。「世界のどこへ行ってもやれる気がするんです」

米国で生きる原田（写真上、ピッツバーグ・リバーハウンズ提供）も中村も、日本サッカー界の特殊性を痛感している



・マーケティングに携わる中村武彦（34）は5年半、MLSの国際部で働いたことがある。本採用に至るまでのエピソードが面白い。インターンになっていきなり、上司に「休みを下さい」と切り出した。帰国してJリーグのクラブや広告代理店を回る。そこで集めた名刺の束をMLS幹部の前に置いた。「僕を雇えば、このアジア市場を開拓できます」。日本人初のMLS職員への道が開けた。

大学まではサッカー選手だった。勤めていた大手企業を辞し、スポーツビジネスの本場、米国の大学で学ぶ。米国では引退した選手が横滑りして経営陣に収まることはまれ。費用対効果が厳密に測られる。選手に20万ドル投資するより、フロントに20万ドル投資する方がリターンが大きいとみなすこともある。

「この国ではアイデア勝負。常に発言、提案しなくてはならない。いわば、走りながら考える」。米国、日本、オーストラリアのクラブが覇を競うパンパシフィック選手権は中村の発案で生まれた。成否は後で考えればいいというお国柄。理屈ではなく、現場感覚を重視して仕事を進める。

いつかJリーグも日本の外へ出て国際舞台でビジネスを展開しなければならない日が来ると信じている。「そこで自分が役割を果たしたい」。磨いたサッカービジネスの腕を生まれ故郷のために振るいたいと願う。

「いいものをいいものとして取り入れていくスピードがすごく速い」。米国で原田と中村が痛感することだ。タフでポジティブでためらいがない。その精神がサッカーをビジネスとして強力に動かしていく。

＝敬称略

（岸名章友）

＝おわり